



自然の涼風を感じる「イワタバコ（岩煙草）」

2024年7月11日



大下条から新野の向かう途中の国道から、ちょっと沢沿いに入った湿った日の当たらない岩場にタバコのような形の葉の植物が、この季節（7月上旬）、星型で紫色した小さな花を咲かせています。「イワタバコ（岩煙草）」です。

写真からもお分かりのように、茎がほとんどなく、岩場の根本から1〜2、3枚の大きな葉を広げ、その葉から細長い花茎（かけ



い：葉を付けず花だけをつける茎）が伸び、うつむいた数個の花を付ける、とても風変わりな山野草です。花をつけないとこんな感じで、岩から葉がへばりつくように生えて見えます。



NHKの連続テレビ小説「らんまん」の主人公で、「日本植物学の父」とも呼ばれた牧野富太郎博士が、この「イワタバコ」を愛したと言われてます。今日は朝から雨が降り、その雨の雫が葉や花から滴り、涼しげで美しい雰囲気醸し出しています。

「ギボウシ（擬宝珠）」

2024年7月14日

過日紹介した「イワタバコ」の群落に混じって、葉や花も大型の「ギボウシ（擬宝珠）」が咲いてまし



た。こちらも強い日差しが苦手な、沢沿いの半日影を好むようです。花茎を高く伸ばし、薄青色のラッパ状の花が、下から徐々に咲いていく、庭先でもよく見かける植物です。庭先の方はこちらよりかなり大型で、また、葉に白っぽい斑が入ったものもあり等、亜種や変種も多いようです。花の蕾（つぼみ）が、橋の欄干や神社・寺院の階段の手すりの上にある、玉ねぎのような形の装飾物＝擬宝珠（ぎぼうじゅ）に似ていることからこの名がついたそうです。



「オニユリ（鬼百合）」

2024年7月17日

今日は朝から隣村の泰阜中の進路講話に行ってきました。道中の道路脇の土手や泰阜中前のロータリーの花壇にヤマユリが咲き、周辺に百合の甘い芳香が漂わせています。先日も阿南高校敷地内に咲いたヤマユリを紹介しましたが、このヤマユリの群落、本当に見事です。



そんな中、オレンジ色の百合の「オニユリ（鬼百合）」が負けじと咲いていました。とても目立つオレンジ色の花びらが、大きく外側にそり返り、下向きに



咲く姿が、赤鬼を連想させることから名付けられました。ヤマユリと比べると、ヤマユリほど大型で花付きもそれほどでないためインパクトは強く感じま

せんが、他の花に比べれば十分豪華な花姿です。一部の地域では、オニユリが咲くと豊作となると信じられ、昔より農家の間で大切にされてきたそうです。そういえば、庭先ではヤマユリよりもオニユリの方を良く見かけます。そのせいかもしれません。また、鬼を連想させる花姿より、オニユリを家に飾ると悪霊を追い払うとも言われてきたそうです。オニユリに似た花に「コオニユリ」がありますが、違いは、一回り小さく、葉の付け根に黒っぽい“むかご”を作らないそうです。写真の花の葉の付け根（写真を拡大して見てください。）には黒っぽい“むかご”が見えますので、こちらは「オニユリ」ですね。茶碗蒸しによく入っているホクホクした食感の“ユリネ（百合根）”は、オニユリやコオニユリの球根（＝鱗茎）です。庭先でオニユリを見かけるのは、このためかな？

「シデシャジン（四手沙参）」

2024年7月22日



キキョウの仲間だそうですが、似ているのは花の色だけで、花びららご覧のように細長くそり返り特徴的な花です。下條村の陽阜近くで咲いているのを見つけました。頭の「シデ」は、神社のしめ縄などにヒラヒラと飾られている白い紙＝「四手（シデ）」



のことで、以前シデがつく植物「シデコブシ」をブログで紹介しましたね。シデの下の「シャジン（沙参）」は何なのか調べてみると、根がツリガネニンジン（ツリガネニンジンの生薬名＝沙参）に似ていることから「シデシャジン」と名がついたそうです。

「ヤマホトトギス（山杜鵑草）」

2024年7月25日

白地の花びら（花弁）に紫色の独特な斑紋が、鳥のホトトギス（不如帰）の胸の模様似ていることから、「ホトトギス（杜鵑草）」と名をついたホトトギスの仲間です。花びらが下にそり返るのが「ヤマホトトギス」ですが、似た仲間に「ヤマジノホトトギス」もあり、もしかしたらそちらかもしれません。



次の写真のような、紫色の斑紋が多めのものもありました。

それにしても、このホトトギス（の仲間）の花は、色だけでなく形も複雑ですね。花の中心から太い柱が立ち、その先端にめしべとおしべが放射状に広がっていて、2段重ねの花のようにも見えます。おしべは6本（紫の斑点がないもの）、めしべは3本（花びらと同様、紫の斑点があるもの）です。今回の花は、先日紹介した「シデシャジン」と同じく、下條村の陽阜（ひさわ）の吉岡城址近くで見つけました。



ひときわ目立つ「フシグロセンノウ（節黒仙翁）」

2024年8月1日



クッキリと鮮やかな朱赤色（オレンジ色）で、まるで作り物のようによく目立つ花です。それほど大型の花ではないのですが、車で走っていてもとても

目がつく花です。下條村陽阜（ひさわ）の吉岡城址付近で見つけました。ナデシコ科の多年草で、8月から秋にかけて、茎の先端に大きさ（花径）5cmほどの花びら5枚（五弁花）の花を咲かせます。オレンジ色の花は日本の山野草の中でもかなり珍しいですね。

フシグロと名がついたくらいですので、茎の節が黒いのが特徴です。

センノウの名の由来は、京都の仙翁寺でたくさん花ついていたことからの説と、または、中国原産の「センノウ（仙翁）」に似ているとの説があるそうです。



葉なき優雅な花「ナツズイセン（夏水仙）」

2024年8月21日

日中はまだまだ暑い日が続いていますが、季節はお盆も過ぎ秋の虫が鳴き始める8月下旬、優雅で繊細な淡いピンク色の花が咲き始めました。夏の風物詩でもある「ナツズイセン（夏水仙）」です。



スイセン（水仙）と名がついていますが、スイセンの仲間ではなくヒガンバナの仲間（ヒガンバナ科）です。葉が水仙に似ており、夏に咲くことから名がついたようです。このナツズイセン、ヒガンバナ（彼岸花）のように花が咲く時葉がありません。そして、淡いピンク色の花は百合の花にも似ていることから「ハダカユリ（裸百合）」と呼ばれることもあるそうです。葉がなく細長い花茎の上に数輪の大型の花が咲き、バランス的にも不思議な花ですね。



山野でも見かけますが、この花、古い時代に中国からわたり、人家の庭先で栽培していたものが野生化していったようです。この写真の花も、（阿南町大下条の）もと屋敷跡と思われる石垣のある空き地で見かけました。ヒガンバナと同じく三倍体（※）で、タネは作らず土の中の鱗茎（球根のようなもの）で増えていきます。また、このナツズイセン、美しい花（植物）を咲かせますが、植物全体が有毒ですので、（ニラと）間違えて食べないように。（ヒガンバナ科、スイセンも有毒植物です。）

※ 三倍体：通常の生物は父親由来と母親由来の染色体を2セット持つ二倍体ですが、3セットもつ個体を三倍体といいます。（突然変異の一種です。）秋に咲く「ヒガンバナ」（別名 曼珠沙華）も三倍体です。